



強みを生かしつつ 世界標準の大学に

「将来は暗くない。アグレッシブな生き方を！」

◎小野 元之 ・独立行政法人日本学術振興会 理事長

◎上原 洋允 ・理事長

社会が活力を失い、世界の中でも存在感がなくなっている日本。ピンチをチャンスに変えるカギは、大学教育と学術研究にありと、小野元之・日本学術振興会理事長は語る。教育は人も国も変える。大学の改革と国際化などをめぐる対談から、関西大学の将来像が見えてくる。



◆「日本を、教育行政を変えたい」

上原 関西大学の客員教授・教育顧問・経営審議会委員等を務めていただいております小野先生は、旧文部省時代から文部科学省事務次官を経て日本学術振興会理事長の現在まで、一貫して日本の教育の充実に取り組んでこられました。私は、先生の本学でのご講演をお聴きして、我が国が今後世界各国に伍して発展していく道は教育に力を入れる以外にないと力説されたことに感銘を受けました。先生の教育に対する情熱はどのようにしてはぐまれたのか、というところからお伺いしたいと思います。

小野 私の父親は高校の教員で、その後教育委員会の職員、最後は岡山県の教育長を務めておりましたので、教育現場や教育のあり方には子どものころから関心がありました。高校まではおとなしかったのですが、大学に入ってから少し過激になり、世の中を変えなければいけないという意欲を強く持つようになり、学生運動にも参加しました。京都大学の杉村敏正先生のゼミで、行政法の理論に感化され、きちんとした教育行政をしなければいけないと考えるようになりました。

日本の将来のためには教育が大事なのに、当時の文部省には旧態依然としたイメージがありました。日本を変えたい、良くしたい。もっと柔軟な発想で、新しい時代にふさわしい文部省にしたい。こんな意欲に燃えていたものですから、とても生意気で、激しい議論をしたりして、上司をてこずらせた職員でした。

◆日本の再生は教育に力を入れることから

上原 小野先生は学術振興会に移られてからも、独創的・先駆的研究を進展させる科学研究費の拡充や、優れた若手研究者に対して主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保を図る特別研究員制度、世界トップレベルの研究拠点プログラム、学術の国際交流など、世界を視野に入れた先駆的な学術研究振興策の旗を振っておられます。その背景には、今の日本に対する危機意識が感じられます。

小野 目標と自信を喪失したかに見える今の日本を、どうやったら再生できるのか。どうしたら日本をもっと元気な国にできるのかということを考えますと、資源のない日本はやはり人材の育成で生きていくしかない。過去の歴史をみますと、明治5年の学制発布により初等教育に力を入れたことが日本の繁栄のベースになっていると思うのです。もう一つは、第二次世界大戦後に6・3・3・4制を導入して高等教育の普及に力を入れたことが、国民全体の知的レベルを上げ、敗戦の焼野が原からの復興と発展を可能にしました。過去2回の難局を、その時の政府が教育に力を入れることで乗り越えることができたのです。

今ちょっと心配なのは、国全体が行き詰まっていて元気がなく、この国がどの方向に進むべきか、よく見えていないことです。先進国のお手本を学んで発展しているときには、国民が勤勉で初等中等教育がしっかりしていて、官民一体となって協力し合って伸びていきました。ところが、世界第二の経済大国になって先進国の仲間入りをしたら、目標がなくなってしまったかのようなのです。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』みたいに坂を上っていく段階は、みんな上を目指して必死です。上りきった途端に、少し頑張りも失ってしまいました。戦後60年たって、いろんな制度が疲弊している面もあります。行政や政治が日本の進むべき方向を明確にし、目標を示したうえで、もう一度坂を上ってみる努力をする必要があります。

上原 確かに日本は戦後、再起不能かと思われたような状況から立ち上がって発展を遂げました。しかし、今やアジアの新興国が日本に追い付き追い越せて勢いついています。資源に乏しく人口が少なくなる一方の日本が国際競争の中でどう生き抜いていけばよいか、まさに切実な問題です。やはり進むべき道は、先端科学技術の開発や教育レベルの高さで世界に対抗できるようにする方向ですね。

小野 ええ。今、何を重視すべきかという、私は大学をしっかり支援していくことだと思っています。何も強大な軍事大国になる必要はないわけです。文化の度合いが高く、国民が長生きでき、幸せで生きがいのある日本、環境問題などで世界に貢献する日本というイメージをしっかり作って、それに向かってみんなで努力することです。

アフリカやアジアの発展途上の国々も、日本に倣って教育に力を入れてきています。たくさんの借金があるとはいえ、まだ経済大国として頑張っている日本は、中国やインドをはじめアジアの国々とうまく付き合いつながりながら、引き続き発展していかなければなりません。

◆感動を与えるような「徳育」の教科書を！

上原 関西大学は来年4月から、高槻市の新キャンパスに小学生を迎え、小学校・中学校・高等学校と一貫した教育を開始します。そこでは、「国際理解力」「情感豊かな心」「健やかな体」を発達段階に応じてバランスよく高め、倫理観と品格を有する「高い人間力」を持つ人材の育成を目的としています。小野先生はご講演の中で、日本の再生のためには「徳育」が重要であると述べておられました。特に小学校や中学校の教育は、家庭と学校が密接な連絡をとって進めなければなりません。子どもが嫌がることであっても、教えずにはいけないことが多くあります。**小野** 明治以来、日本の国民は道徳性が高く、他国の人に敬意を払い、困っている人がいれば助ける、そういう良き伝統がバックグラウンドとなって、国の発展に大きく貢献してきました。最近の子どもたちを見てみると、やはり大人社会全体できちんと教えなければいけないと思うのです。昔はおじいちゃんやおばあちゃんが道徳を子どもに教え諭していたのですが、今の社会でそれは望めません。親が仕事で忙しくて、なかなか子どもの教育にかかわれないということもあります。

そうであれば、学校教育の中で道徳をしっかり教えるべきだ、そのためには教科書にして、感動を与えるような徳育の教科書もちゃんと作るべきだ、というのが私の意見なのです。もちろん反対意見もあります。ただ私は特定の思想を押しつけるつもりではなく、国際社会で羽ばたくためにも身につけていなければならない基本的な道徳を、学校教育でしっかり教えたほうがよいと考えています。

■対談



人間が生きていくには「知」だけではだめで、「徳」と「体」が絶対必要なんです。

小野 元之(おの もとゆき)
1944年岡山県生まれ。68年京都大学法学部卒業、文部省入省。北九州市教育委員会教育長、文化庁次長、文部省官房長などを経て、2000年文部事務次官、01年文部科学事務次官。03年日本学術振興会理事長、04年から独立行政法人日本学術振興会理事長。安倍内閣の教育再生会議委員、21世紀COE・グローバルCOEプログラム委員会委員なども務める。06年レジオンドヌール勲章・シュバリ工章受章。関西大学客員教授。同志社大学客員教授。

上原 今は仏教の精神や儒教の精神も薄れてしまっているから、何を根底にして教育をすればいいのか、道徳的な教典がないのです。先生がおっしゃる徳育の教科書の必要性を感じます。
小野 アメリカやヨーロッパはキリスト教の伝統がありますから、学校が関与しなくても、教会や家庭で宗教を通じて人の生き方が教えられてきました。日本では知育・徳育・体育の三つが大事だと言われているが、「徳」と「体」は隅っこに追いやられがちです。しかし、人間が生きていくには「知」だけではだめで、「徳」と「体」が絶対必要なんです。

◆国際化を図り、カリキュラムを世界標準に

上原 関西大学は昨年10月1日から「教育推進部」「研究推進部」「社会連携部」「国際部」の4部を設置し、戦略的な改革体制を構築しました。少子化と大学間の競争激化の中で、大学の改革についてもご意見をお聞かせください。

小野 18歳人口が減っていくなかで、これから大学がどう生き残りを図るかということは重要な課題です。私が考えていますのは、第一に「国際化」を図ることです。文部科学省も国際化拠点整備事業(グローバル30)という新しいプロジェクトで引っ張ってこうとしています。中国やインドでは経済が発展してきていますが、まだ大学が十分ではありませんから留学希望者が多い。しかし、日本の大学には日本語という言葉のバリアがあります。まず日本語を勉強しないと日本の大学に入れないというのは問題です。英語だけで卒業できるコースや、日本に来てから少しずつ日本語を覚えればよいというカリキュラムなどで、もっと国際化を進めるべきです。

日本の英語教育も改めなければいけません。コミュニケーションのツールとしての英語をしっかり学べるようにして、分野ごとに英語で行う講義を増やす必要があります。

上原 小野先生は、21世紀は知識基盤社会であり、世界から優秀な学生を集めるために、世界標準のカリキュラムにしていかなければいけないとお考えですね。

小野 EUの中ではエラスムス計画のように、国が異なっても単位の互換が可能なシステムができつつあります。現実には、中国やインドの優秀な学生はアメリカやイギリスなどの英語圏に行っています。

日本にやってくる留学生は現在約12万5千人ですが、文部科学省をはじめ関係省庁が協力し、2020年をめどに30万人を受け入れる「留学生30万人計画」が進んでいます。関西大学も、留学生に対して魅力的な大学であることをアピールしていく必要があります。

上原 そのためには、教育内容はもちろん宿泊施設も充実させなければなりません。本学は、今年3月に大阪府の千里留学生会館跡地活用事業コンペに選定され、同跡地を入手しましたので、そこに国際化推進拠点として新たに留学生会館を設立する予定です。

小野 私ども日本学術振興会は、北京やワシントンなど海外10カ所に事務所を置いていて、各大学のランチを本会の海外事務所の中に設けませんかと呼びかけています。単独で外国に事務所を置くのは大変ですから。

上原 確かに、アジアの主要な国に事務所を置いて、そこで交流を図りながら留学生を確保していくことは必要だと思います。

◆「関関同立」の中で安住してはいけない

小野 大学改革の課題の第二は、「連携」です。近隣の大学との連携、高校との連携、産学連携、大阪府や大阪市など地方公共団体との連携、地域社会との連携など。連携することによって、大学単独ではできないことが協力し合ってできるようになります。関大は



戦略的な学部・学科の運営、関西で満足せずに日本の関大、さらに世界の関大を目指さなければいけないと思っています。

関大の強みを生かしながら、関西学院や同志社、立命館、あるいは阪大や京大とも協力して教育・研究を進めていくためには、カリキュラムを一定のスタンダードに合わせるいかねばなりません。

日本の大学の大きな問題点は、卒業生の質の保証ができていないことです。大学に入るまでは難しいのですが、出るときは比較的易しい。4年間で知識、考える力、行動力、意欲などをアップさせ、さらに人間性に磨きをかけて送り出すことができるかどうか。そのためには、教員が自分の研究だけをやっているのではなく、教育にもっと力を入れること、カリキュラムを改革することが不可欠です。

上原 過去には国家権力に対して学問の自由や大学の自治が尊重されねばならない時代もありました。しかし、これからの大学改革には、先生方の頭の切り替えも必要です。競争的研究資金を獲得し、国際的競争に勝ち抜くためにも、良い教育、良い研究が必須です。4年制大学の中でも上位20~30校が、熾烈な争いをしていかなければならない時代となりました。

小野 グローバル化が進んでいますから、ますます世界的な競争になるでしょう。関西大学も「関関同立」の中で安住してられません。理事長や学長のリーダーシップのもと、これが関西大学の強みなんだという特色を明確に示していく必要があります。

◆「アグレッシブな関大生であれ」

上原 先生がおっしゃっている戦略的な学部・学科の運営、関西で満足せずに日本の関大、さらに世界の関大を目指さなければいけないという点は、私もまさにその通りだと思っています。関大をこぞんまりした大学にしてはいけないと、肝に銘じています。

小野 関西大学の卒業生は反骨精神に富んでいて、野性味があり、粘り強く、将来の発展を生み出す力を持っていると思います。やる気があってモチベーションが高く、企業や日本の力になれるという点をさらにアピールし、卒業生の質の高さを保証することが関西大学というブランドを高めていくことにもつながっていきます。「関関同立」の枠にとどまらず、早稲田や慶応にも負けないぞ、という気概を持っていただきたい。

それぞれの学部にも名物教授も各分野に秀でた方もいらっしゃるの、そういう人材を有効に活用するとともに、能力のある方を学部閉じ込めず、他の学部の学生も聲咳に接して単位が取れるような全学的なシステムも考えられます。先生方のやる気を喚起し、いい教育、いい研究をしてもらって、さすが関西大学の出身者だという評価が定着するように、そういうビジョンを理事長が強く打ち出されたらよいのではないのでしょうか。

上原 関西大学でなければできないような教育、研究、社会連携、国際化を推し進めたいと思います。最後に、学生諸君に何かメッセージをお願いします。

小野 関大生に限らず若い人たちの多くが、日本は少子高齢化で将来は暗いというふうに思い込んでいます。私は、それは違うと言いたい。現に関西大学で学んでいる人たちが年を取るころには、少数で上質の生活を維持できるチャンスがあるのです。日本は世界の最長寿国であり、豊かで文化のレベルも高く、自由で安全で平和な国なんです。むしろ恵まれていて、将来

は暗くないはずなんです。皆がもっと幸せになるにはどうしたらいいのかを考えて、アグレッシブな生き方をしてほしい。前向きに、世の中をもっと良くしてやろう、あるいは世界に貢献したい、地域のために頑張ってみよう——そういう意欲を持った関大生であってほしいと思います。
上原 バンカラで生き生きとして元気で活気があり、学の実化を目指した実学的な校風を生かしながら、アグレッシブでありたいと思います。本日はどうもありがとうございました。